



© ハナビスト・冴木一馬

TEACHING ENGLISH NOW

英語教師のための情報誌

特集 高校の英語の授業を知ろう

巻頭エッセイ
花火は平和の象徴 冴木一馬 01

特集
高等学校の学習指導要領外国語を読む 金子朝子 02
新学習指導要領を受けた英語教育に求められるもの
—「コミュニケーション英語Ⅰ」の授業実践を通して— 上本善之 06
発信へつなげる授業 中村邦彦 08
高等学校の授業への橋渡しとなる中学校での授業改善
—コミュニケーション能力の基礎から活用へ— 後藤喜朗 10
[コラム] これが高校の英語教科書だ 三省堂 高校英語教科書編集部 12

連載
英語教師のための基礎講座
授業マネジメントの勘どころ：指導言の改善を求めて(2) 田邊祐司 14
評価クリニック 単語テストはどう作る 根岸雅史 16
授業レポート
『5つの提言』を受けて、今やるべきこと(2)
—ジャンル準拠指導を生かした Writing 指導の一実践 大岩樹生 18
単語の文化的意味 83 but 森住 衛 21
Essay A Club for All Seasons Robin Sakamoto 22
特別企画 編集部 23

AROUND THE WORLD 日本語とエチオピアの言語の共通点(Sidaama 語) [4] ... 河内一博 表紙裏
表紙写真について 台湾ランタンフェスティバル 冴木一馬 表紙裏

Vol.26

FALL 2013
SANSEIDO

人魚構文

角田太作氏と彼の国立国語研究所の研究グループによると、日本語およびアジアのいくつかの言語に「人魚構文」と呼ばれる構文がある。例えば、「花子は明日学校に行く予定だ」のような文である。前半部(上半身)はそれだけで文として成立する「花子は明日学校に行く」という節なのだが、後半部(下半身)は「予定だ」という名詞と述部の標識から成っている。花子は人であり、予定ではないのだが、「花子には予定がある」と解釈される。特に日本語にはこの構文の後半部に使うことができる名詞および名詞から発展したと思われる形式が多い。人魚構文はアジアの地域の言語に見られる特徴の1つであると考えられてきたようである。

しかし、明らかな例は2つのタイプだけとはいえ、この構文は Sidaama 語にも存在する。「…が…する様子だ/ようだ」に相当する構文である。名詞 *gara* 「様子、方法」または後接語 =*gede* 「よう(に)」を使い、最後に述部の標識が来る。

- (1) *diwan-tino* *gar-i=te.*
病気になる-3人称単数女性/完了 様子-の=述部標識女性
「彼女が病気になった様子だ/現在病気である様子だ。」
- (2) *diwan-tino=gede-e=te.*
病気になる-3人称単数女性/完了=ように-長母音化=述部標識女性
「彼女が病気になったようだ/現在病気であるようだ。」

ただし、日本語の人魚構文とは違って、Sidaama 語の2つの人魚構文では、主語は3人称で、たいてい人

間であり、節の動詞の aspekto は制限されている。

角田氏によると、ある言語に少数の人魚構文がある場合、その人魚構文が表す意味は証拠性(どのように話し手が出来事の情報を得たか)に関するものであることが多いそうである。Sidaama 語の2つの人魚構文はまさにこの傾向に当てはまる。

Sidaama 語は基本的に話し言葉で、書かれた記録がないので、これらの構文の歴史的な発展の詳細についてははっきりとはわからない。Sidaama 語が話されているエチオピアがアジアに地理的に遠くないということも、これらの構文の存在に関係しているのかもしれない。

ところが他の用法も見てみると、*gara* も =*gede* も名詞から文法的な形態素へと発展して行く文法化の過程にあるのがわかる。名詞 *gara* は名詞としての性質をすべて備えている(例:文法的な性を持つ、修飾される、属格で使われる)が、文法的な機能も果たす(例:様態や原因や譲歩を表す節を形成する)。後接語 =*gede* は主に文法的な機能も果たす(例:様態や原因や譲歩だけでなく目的を表す節を形成する、補文標識として使われる)が、名詞としての性質も持っている(例:奪格道具格と与格場所格の接尾辞を伴うことができる)。したがって、人魚構文を持つ他の言語と同様に、名詞が文法的な標識に発展するというパターンがこの言語の人魚構文にも見られる。

表紙写真
について

台湾ランタンフェスティバル

冨木一馬 Saeki Kazuma

台湾は世界でも有数の花火王国です。日本のように納涼花火の文化はありませんが、何かあるごとに花火を打ち上げます。特に祭りには花火は付き物のようです。

台湾は道教が主な宗教で、日本と言う神社とお寺の中間的な要素の「廟」がたくさんあります。例えば台東市だけでも300近くの廟があり、元宵節(旧暦の1月15日)には半数以上の廟で祭りが行われ、花火や爆竹が使われます。日本のように警察官や警備員は立っておりません。表紙の写真でもわかるように、本

に目の前で平然と花火が上げられます。

この写真は同じ元宵節に行われる「ランタンフェスティバル」の花火です。ランタンは台湾の元宵節の古くからの文化で、旧暦の15日に龍山寺や松山慈祐宮、台北北投關渡宮や萬華青山宮など多くの廟で展示されていたものです。この日は爆竹や花火を上げたり、手に松明やランタンを持ったりして「家族皆が幸せに過ごせますように」という願いを込めます。古くは各廟を、ランタンを見て廻ったものですが、地域



のランタンを一同に集めて見てもらったらどうかという趣旨の下、1990年から「ランタンフェスティバル」が始まりました。この祭りは台北を始め、各主要都市で毎年行われ、多くのイベントとともに花火が打ち上げられます。この日だけでも台湾国内の1000ヶ所近くで打ち上げられ、台東市に出かけた時などは市の中心部にいると四方八方から花火が上がって撮影するのに困ったほどでした。台湾人は日本人以上に花火好きなのかもしれません。



花火は平和の象徴

冨木一馬 Saeki Kazuma

私は、24歳のときに脱サラをして報道カメラマンになりました。周りの友人も含め、報道カメラマンをしている人たちは、少なからず自分なりの正義感をもっています。私も先輩達の仕事ぶりを見て、少しでも世の中のためと思う気持ちで毎日駆け回っていました。韓国の民主化問題、フィリピンのアキノ政変など、国内だけにとらわれず海外も見てきたつもりです。韓国では迫力ある写真を撮ろうと、ヘルメットを被り、ガスマスクを装着して学生と軍隊の間に入り、銃撃を受けたこともありました。一発の銃弾は私のカメラバッグを貫通し、私は間一髪命拾いをしました。

しかし、どれだけ頑張っても自分の理想には近づかず、悩んでいるときに会ったのが花火でした。きっかけは大阪の「天神祭」。主催者からの依頼で、花火大会の記録の仕事でした。このとき、生まれて初めて花火の撮影をしました。大きな「ドーン」という音に煌びやかな光のシャワー。私は一瞬にして心を奪われました。初恋のような心持ちでした。思い悩んでいた気持ちに「何か新しい光みたいなものを与えてもらった」。そんな感じがしました。私はいつの間にか、報道カメラマンから花火写真家になり、そして1997年には花火師の資格も取得し、「ハナビスト」と名乗るようになりました。

「ハナビスト」という言葉は私が作った造語で、辞書には載っていません。当時は横文字職業が華やかなときで、何かいい肩書きがないかと考えていたときに思いついたものです。普段は世界中の花火を写真や動画に記録しながら、火薬を含めた歴史や文化の研究をしています。

現在、国連加盟国は193カ国ありますが、花火はそのうちの約30カ国にしか存在しません。また

私たち素人が楽しむ線香花火のような「おもちゃ花火」(玩具花火)は、その半分の約15カ国にしかありません。何故なら、多くの西欧の国々では古くから宗教や人種の違いによる紛争が続き、たとえ「おもちゃ花火」といっても、一般の人々には火薬を扱わせないという文化が色濃く残っているのです。これはハナビストになって海外の火薬や花火の歴史を研究した上でわかったことです。まさに花火は「平和の象徴」であり、私たち日本人は子どもの頃から何の疑問もなく自由に花火を楽しんできた平和な国の人たちなのです。近年も世界中で様々な紛争が続いていますが、私は花火を通して、報道カメラマン時代には成しえなかった「人間の幸福とは何か」を皆さんにお伝えできればと考えております。

また、「ハナビスト」というこの職業も、世界中で1人しかおりません。花火や火薬に関する科学的な研究者は世界中にありますが、私のような民俗学的な研究者には、今までに会ったこともありません。1人でも前任者がいれば、その人の生き方を参考にできますが、私の場合は全くいないので、常に仕事と生き方を模索しながら毎日を過ごしています。これまで培ったことは、「決して諦めないで続けること」。まさに、継続は力なり。こうやって皆さんに私の思いを伝えられるのも、諦めないで続けてきたお蔭といえましょう。

さえき かずま

山形県生まれ。ハナビスト。報道カメラマンを経て、1987年から花火の撮影を始める。1997年に花火師(煙火打掃従事者)の資格を取得。世界各地の花火を撮影しながら、その歴史や文化の研究・解説、花火を題材にした版画の製作、花火大会運営のプロデュースなど、幅広く活動する。

高等学校の学習指導要領外国語を読む

金子朝子

(昭和女子大学)

1. はじめに

高等学校では、平成25年4月の入学生から年次進行で新学習指導要領外国語(英語)が適用となり、平成27年度には、小学校から高等学校までのすべての移行が終了することとなる。

小学校外国語活動ならびに中学校、高等学校の外国語科の目標を並べて比較してみると、英語を通して「言語や文化についての理解を深め」、「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り」、「コミュニケーション能力を養う」という3つの柱が明確である。表1に下線で示すように、徐々にその完成度を高めつつ、最終的に高等学校修了までに英語による「コミュニケーション能力を養う」ことを目指したものとなっている。

表1 小・中・高の外国語活動・外国語科の目標

小学校	中学校	高等学校
外国語を通じて、言語や文化について <u>体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、<u>外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う。</u></u>	外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、 <u>聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどのコミュニケーション能力の基礎を養う。</u>	外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、 <u>情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりするコミュニケーション能力を養う。</u>

(※)下線は、筆者が加えたもの。

そのため高等学校では、最終目標とするコミュニケーション能力を養うために、その基礎となる中学校での学習内容を円滑に移行し、中学校で身に付けた4技能を統合して内容的にまとまりのある受信・発信ができるようにすることが、改善の大きなポイントとなっている。

2. 高等学校外国語の科目編成

次の図1は、新・旧の科目構成を示している(旧：平成26年度まで適用の従来のもの)。まず、中学校と高等学校の学習をスムーズに繋ぐことを目的として、「コミュニケーション英語基礎」が新設となった。中学校と高等学校の授業間のギャップが大きすぎるという現場の声に応えたものである。

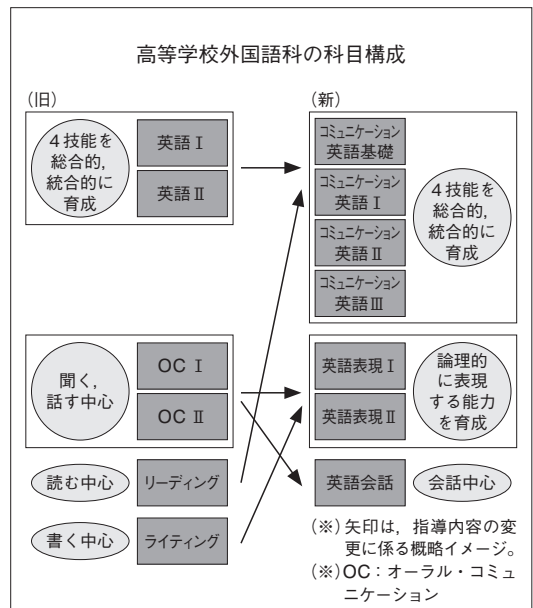


図1 高等学校外国語科の科目構成の新・旧比較

(文部科学省 http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/news/081223/014.pdf に基づく)

また、以前の「英語Ⅰ」「英語Ⅱ」「リーディング」を再編して、「コミュニケーション英語」を置いた。これは、ややもすれば文法・訳読が中心となり、4技能のうちの読むことや書くことに偏りがちであった指導から、生徒が英語に触れる機会を充実し、授業を実際のコミュニケーションの場とすることを中心的な目的としたためである。

更に、これまでの「オーラル・コミュニケーション」の指導内容のうち、特にインタラクティブにコミュニケーションを行う能力を高めることを目的として「英語会話」を置いている。また、スピーキング、ライティングを中心に発信力を育成し、聞いたり読んだりした内容を踏まえて自分の考えなどを話したり書いたりすることを通じて、論理的思考力や発信力を養う目的を持つ科目として「英語表現」が編成された。豊富な題材に触れさせることも明記され、「コミュニケーション英語」をサポートする意味合いの濃い科目となっている。

卒業単位数は現行どおり74単位のままだが、週当たりの授業時数(全日制)は標準の30単位時間を超えることもできることが明確化された。また、共通性と多様性のバランスを重視して、学習の基盤となる国語、数学、外国語に新たに共通必修科目を設定することとなり、外国語ではこれまでの選択必修「英語Ⅰ」または「オーラル・コミュニケーションⅠ」よりどちらか1つを選択から「コミュニケーション英語Ⅰ」を共通必修科目と設定している。

科目編成を総合的に見ると、高等学校から更に続く大学教育も含めた生涯学習への繋がりを考慮して、英語による一定のコミュニケーション能力を定着させるための編成となっていることがわかる。

3. 新学習指導要領外国語に基づく指導

現場の指導はどのように変わるのだろうか。そのポイントとなる点について、以下に説明したい。

A. 語彙指導

新学習指導要領の大方針の1つとして外国語教育の充実が挙げられ、それを受けて、高等学校で指導する標準的な語彙数は、中学校で学習した語に「コミュニケーション英語」の「Ⅰ」でプラス400語、

「Ⅱ」でプラス700語、「Ⅲ」でさらにプラス700語程度の新語を加えた数となっている。中・高等学校を合わせて3,000語程度にまで増加することになる。これまで改訂を重ねるごとに、指導できる語数が少なくなりすぎるという批判があり、コミュニケーションを十分行うためには増加が必要だという判断の結果といえよう。

中学校では週当たりの授業時間数が1時間増となり、指導語彙数も300語が加わって1,200語程度となるので、計算上は、これまで高等学校で指導していた語彙の15~25%程がすでに中学校で指導済みである。ここは中学校での学習成果に大いに期待するところである。また、新学習指導要領は最低基準を示したものであることが明確化されている。そのため、高等学校ではさらに新しい語彙の学習を積み重ね、より内容のあるコミュニケーションを行うのに十分な語彙力を養っていくことが望まれており、現場の負担感もかなり大きい。

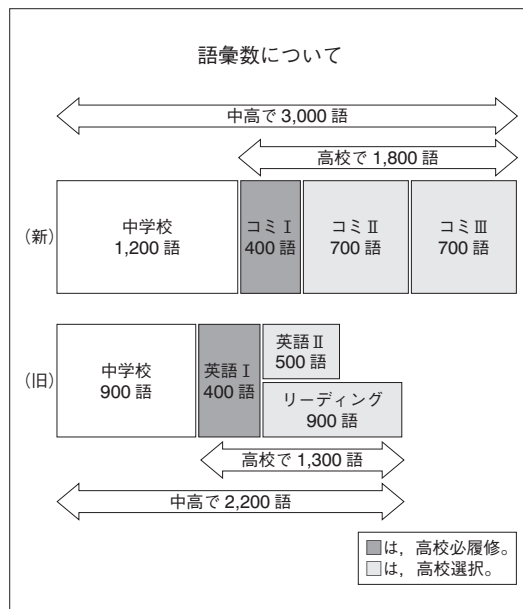


図2. 習得語彙数の新・旧比較
(文部科学省 http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/news/081223/014.pdf に基づく)

B. コミュニケーション能力の育成

発信型英語力育成のための科目である「英語表現」は、「Ⅰ」で情報や考えなどを伝える能力を養い、即興で話す、発表する、他の意見との比較をして書く

等を、「Ⅱ」では課題を解決する目的を持って英語を発信する能力に至るまでを身に付ける。「コミュニケーション英語」においても同様に「Ⅱ」「Ⅲ」ではかなり高レベルのコミュニケーション能力を身に付けることを目指している。新学習指導要領では、英語に慣れ親しむことは小学校でできているので、中学校では十分に英語の4技能を用いたコミュニケーション活動を行うことを前提にして、高等学校では、「コミュニケーション英語」も「英語表現」も、ともに「Ⅰ」でBICS (Basic Interpersonal Communication Skills = 対人関係処理のための基本的なコミュニケーションスキル) を十分定着させ、「Ⅱ」「Ⅲ」では授業内容を理解し、自ら考え、創造的に読み書きできる能力CALP (Cognitive Academic Language Proficiency = 学業に必要な事柄を理解し考えることができるための言語運用能力) を身に付けるという流れとなっていると考えられる。

2008年の中央教育審議会の答申は、文法・訳読方式から脱却して、「聞き、話し、読み、書く」ことすべての基礎に立って、コミュニケーションの中で自分の考えなどについて内容的にまとまりのある発信ができるようにすることの重要性を指摘した。これに応じて、高等学校の学習指導要領では、4技能を有機的に結び付けることを強調した経緯がある。そのため、文脈から取り出して1つの表現や技能の指導のみを行うのではなく、現実の言語の使用場面に近い自然なコミュニケーションを反映して、「言語の使用場面」と「言語の働き」を考慮しながら、他の技能と組み合わせて「有機的」な指導を行うことの必要性を強調している。旧学習指導要領にある「言語の使用場面の例」と「言語の働きの例」の提示は、こうした点に留意して指導する方向性を示したものであった。中学校でも旧学習指導要領から同様の提示があり、中学校で指導にあられる先生方にも馴染みのある概念であろう。後に述べる、教師は「英語で指導することを原則とする」という規定と合わせて、コミュニケーション能力を育成するためには欠かせないポイントと考えられる。

実際に授業で、有機的な活動をどのように行うかについては、現場の教師に委ねられており、教科書

もこうした点を配慮した編集となっている。

C. コミュニケーションを支える文法指導と言語活動

新学習指導要領では文法指導の必要性がより明確になっている。しかしそれは、文法の規則を知識として教えることを指すのではなく、コミュニケーションを支えるものとして文法を捉え、文法指導を言語活動と一体的に行うように改善することを意図している。

「コミュニケーション英語Ⅰ」では、「言語活動と効果的に関連付けながら」、文法事項に「掲げるすべての事項を適切に取り扱うものとする」と規定されている。つまり、不定詞、関係代名詞、関係副詞、助動詞、代名詞のうちitが名詞用法の句及び節を指すもの、動詞の時制など、仮定法、分詞構文のすべてについて指導することとなっている。しかし、例えば「仮定法」について考えると、少なくとも英語では「仮定法」の表現があることを指導するという意味であって、ifを含まない仮定法や、as ifを用いた仮定法などの、細部の指導については段階的に指導することが可能である。適切なコミュニケーションを行うために必要な文法の基礎を学ぶという視点から、まず「Ⅰ」ですべての基本を学び、言語活動を通して定着を図り、「Ⅱ」「Ⅲ」ではさらに幅広い言語活動を行って理解をより深めるとともに、知識に留めず運用力としていくことが趣旨と考えられる。

また、中学校と同様に、文を「文型」という型によって分類するような指導に陥らないように配慮し、文の構造自体に目を向けることを意図して、従来の学習指導要領で用いられていた「文型」に替えて「文構造」という語を用いている。例えば、want/enjoy/knowなどの動詞に続く目的語が、to不定詞/動名詞/that節のうちどれなのか、また、rememberなどto不定詞と動名詞の両方を目的語とすることができる動詞ではそれぞれどのような意味を表すのか、といったように、文型ではなく構造と意味の結びつきに注意を向ける必要があることが強調されている。このように、より広く英文の構造を表すものとして「文構造」という語が用いられている。

もともと授業を英語で行うことは、教室という場

をコミュニケーションの練習の場とする1つの方法であり、それ自体が目的ではない。科目の名称に「コミュニケーション」が付いたのも、言語活動を授業で行うことを明確にするためであり、4技能を統合した活動中心の授業では、教師が英語を使う機会も多くなるはずである。新学習指導要領解説にも、この規定は授業をコミュニケーションの場とするこの重要性を強調するもので、「英語による言語活動を行うことが授業の中心となっていれば、必要に応じて、日本語を交えて授業を行うことも考えられる」と書かれている。中学校では英語による指導がかなり定着しはじめているように見受けられるが、高等学校ではまだ行き渡るまでに時間が必要である。様々なレベルの生徒が混在する授業で、定められた進度に従ってどの様に英語による授業を行うかは、各高等学校が実状に合わせて適切な裁量をする必要があろう。

4. おわりに

中学校から高等学校まで、教師が毎年教える英語の知識・技能量を100とし、習得能力がそれぞれ80%と50%の生徒を想定して、各学年で完全習得される英語を単純計算してみると、表2のようになる。

表2 指導と習得の推移

学年	習得率	80%	50%
中1		80/100	50/100
中2		144/(80+100)	75/(50+100)
中3		195/(144+100)	88/(75+100)
高1		236/(195+100)	94/(88+100)
高2		268/(236+100)	97/(94+100)
高3		294/(268+100)	99/(97+100)

中2以上の分母が、200、300と毎年増えず、前の年の習得量に新しく学ぶ100を加えて計算してあるのは、英語の学習は、今持っている知識・技能に新しい知識・技能を加えて、常にそれを組み替え再構築をしながら学んでいくものだからである。もっとも、実際の英語の学習では、動機、学習スタ

イル、個性など習得量を決定するさまざまな要因があり、この表のとおりに進むとは限らない。しかし、例えば授業で学んだことの80%を習得する力を持っていても、数字上では高校卒業時にやっと中学校で教えた内容(300)を完全に身に付ける程度になってしまう。習得能力が50%以下の生徒がいるとすれば、結果は悲惨である。どれほど分母を増やすこと、つまり生徒が英語学習への動機を持ち続け、基礎の定着をしっかりと行うことが重要であるかが明白だ。中学校で十分な基礎力を養っていただけることを多に期待する所以である。

中学校英語で身に付けた運用力を基礎に、高校英語にスムーズに移行し、必要な構文・文法をコミュニケーション活動を通して確実に身に付けることで初めて、4技能を統合したコミュニケーション力が培われる。基礎的な運用力がないままにコミュニケーションの練習のみを行っても、砂上の楼閣となる。生徒それぞれが今持っている英語力に応じて、運用力を確実に伸ばす授業を目指す現場の対応はそう容易ではない。

戦後初めての教育基本法の改訂を受けて、「ゆとり教育」から脱却し、義務教育段階での学習内容を着実に定着させ、高等学校修了時には現場で通用するコミュニケーション能力にまで高めることをポイントとした改訂である。しかし、新学習指導要領に準拠した中学校の英語教科書の平均ページ数は、授業時数が25%増加した分とほとんど同程度の増加であるのに、高等学校では最低基準の授業時数はそのままだが、使用する英語の教科書の平均ページ数は、以前に比べて20%以上増えている。また、指導要領の規定は最低限を示すことが明確に打ち出されると同時に、いわゆる「はじめ規定」が取り去られたことで、教科書の難易度の幅もさらに拡大している。授業を英語で行うことも含めて、高等学校でも、ますます現場の教師の指導力が重要な鍵となってきている。

【参考文献】
 文部科学省。「2008年1月17日『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善について(答申)』」、「新学習指導要領の基本的な理解」「新学習指導要領・生きる力」http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/ (2013年6月16日検索)
 金子朝子(2013)。「学習指導要領が目指すもの」『第二言語習得と英語科教育法』JACET SLA研究会編著 開拓社。

新学習指導要領を受けた英語教育に求められるもの —「コミュニケーション英語Ⅰ」の授業実践を通して—

上本善之

(兵庫県立山崎高等学校)

1. 新学習指導要領を受けて

本年度、新学習指導要領に基づいた新カリキュラムを学ぶ生徒たちが初めて入学してきました。新学習指導要領では、「4技能を総合的に育成する」ことが繰り返し述べられています。科目名もそれぞれ「英語コミュニケーション」「英語表現」「英語会話」と変化し、「読む」「聞く」「話す」「書く」活動を授業の中心とした上で、文法指導も言語活動と一体的に行うことが求められています。また、授業も基本的には英語で行うことから、生徒はより英語を「使う」機会に恵まれることになったと言えるでしょう。ただし、ドリル形式の問題演習や、文法解説の時間が必然的に減少することから、大学入試への不安を覚える教員もいます。この変化にいかに対応するかが、現在の高校教員に求められている課題です。

2. 言語習得へのアプローチの変化

言語のルール(文法)を習得するには、①「大量の英文を内在化した後、それを文法的にカテゴライズする方法」と、②「文法を導入した後、演習を通じて慣れさせる方法」があります。①は母語の習得プロセスに、②は伝統的な外国語の習得プロセスに近いものです。①の指導法だけでは、3年間という限られた時間で大学入試に対応する文法力を身につけることが難しく、②の指導法だけでは、Accuracy(正確性)は身についても、Fluency(流暢さ)が犠牲になります。入試という直近の課題をクリアしつつ、母語に近い実践的なコミュニケーション力を身につけさせるため、①と②をバランス良く指導する必要があります。従来型の指導は②に偏りがあつたと思われるので、新学習指導要領の導入により、

①に比重をシフトしていくことになるでしょう。

本校では、①の前半部(英文の内在化)と、②の後半部(演習)を主に「コミュニケーション英語Ⅰ」が担い、①の後半部(文法的なカテゴライズ)と、②の前半部(文法の導入)を「英語表現Ⅰ」が担っています。勿論、①②ともに横断的であるべきで、特に「英語表現Ⅰ」がただの文法の演習にならないように注意する必要がありますが、教師側の基本的な指導スタンスを示してやったほうが、生徒は授業のポイントを理解しやすいと考えています。

3. 本校の授業実践より

それでは、本校の「コミュニケーション英語Ⅰ」を例にとって、実際の授業内容をご紹介します。

まず、「英語の授業は英語で」という雰囲気を作るため、最初の3分程度は英語で雑談をします。“What did you do last weekend?”などと生徒に質問することもあれば、私自身の個人的な話をすることもあります。その際、既習事項の復習や、新しい表現の導入を簡単に行います。例えば、先日、私が風邪で喉を痛めていた時には、“I have been ill since last Saturday, and now I have a sore throat.”と話し、前週に教科書で扱った現在完了の継続用法を確認し、新語“sore”を辞書で引かせて導入しました。教師が現在置かれている状況と関連させることで、教科書の例文よりも、生徒の記憶に強く残ります。他教科ではアイスブレイクにしかならない雑談でも、英語で行えば立派な言語活動です。

続いて、レッスンの導入に移りますが、本校は英語に苦手意識を持つ生徒が多いため、導入にかなり気を使います。ここでのレッスンのTopicへの興味の持たせ方が、その後の学習への集中力に大きく

影響します。兵庫県の全公立高校には大型テレビが配置されていますので、iPadを接続し、関連する写真、動画、ウェブサイト、地図などを紹介して興味を持たせます。この導入も英語で行いますが、全感覚情報の70%以上は視覚から入ってくると言われるように、視覚教材を上手く使えば、英語が苦手な生徒でも乗り遅れることは少ないようです。

各レッスンでは、新出語の発音、品詞、意味を確認し、本文のCDを一度聞かせ、音読をします。その後、3分程度の黙読時間を与え、口頭で質問をして大まかな内容を確認します。ここでは細かい文法には触れず、内容理解のための質問に限定します。質問を理解しやすくするため、例えば、“Where did he put a device to make electricity?”という質問なら、“He invented a device to make electricity. Then, where did he put it?”のように、前置きでストーリーを確認し、疑問文自体はなるべくシンプルにします。特に口頭では、不定詞や関係詞による名詞の修飾は避けています。

次に、本文をチャンクごとに区切ったワークシートを配布します。左側には英語、右側には日本語を配置したもので、押さえておきたい文法や表現の含まれる日本語チャンクを空欄にしておき、生徒に埋めさせます。英語が特に苦手な生徒は、ここで本文内容を理解させます。ワークシートの空欄の意味を確認し、本文の意味、表現、文法を十分に理解させたら、音読活動で表現の定着に入っていきます。

音読活動は、リピーティング、日本語を読んで英語を読む(教師&生徒、または生徒同士のペア)、リード&ルックアップ、シャドーイングといった基本的な活動に加え、時々ゲーム形式の音読を行い、生徒が飽きないよう工夫しています。音読活動の締めくくりは、何も見ずに教師が言った日本語を英語に変換する活動で、この頃にはかなり英文は定着しています。この音読活動への参加意欲を高めるため、定期的に本文の暗唱テストを行っています。

また、各レッスンのまとめに、レッスンの内容に関連した表現活動(ファッションに関するレッスンなら、好きなファッションの紹介等)を行い、自分の意見をクラスで発表する機会を与えています。

以上のように、「コミュニケーション英語I」では、

徹底したインプットとインテイクを行っています。ここで取り込んだ英文が、「英語表現I」や、次年度以降の発展的な活動に繋がると考えています。

4. ミスを恐れないこと

授業で心がけていることは、「説明を最小限にして、生徒の活動時間を多くすること」と、「ミスを恐れないこと」です。「英語の授業は英語で」を実践する上で特に重要なのが後者で、生徒には常々、“Don't be afraid of making mistakes.”と伝えています。我々教師でもミスをします。特に、話し言葉の場合は、母語である日本語でも日常的にミスを犯します。しかし、それを気にすることはほとんどありません。話し言葉は一発勝負で、ミスは避けられないからです。ですから、生徒にも、ミスしてもいいから積極的に発言することを繰り返し伝えます。「英語の授業は英語で」に不安を覚える教師もいますが、教師が間違いを恐れず話す姿勢を生徒に見せることが大切だと思います。そういった姿勢が、「お互いに英語を使う」という雰囲気を作り出します。先日、とある生徒が、どうしても英語の表現が思いつかず、それでもどうにか意見を言おうと、前課で習った表現を使い、“May I speak Japanese?”と自ら断りを入れてきた時には、感無量でした。

5. 最後に

公立小学校における外国語活動が必修化されて2年が経ちました。中学校でも、昨年度より新学習指導要領による授業が実施されています。今後、英語教育においては、小中高の連携がさらに大切なものとなるでしょう。首尾一貫した教育で、生徒達には、様々な状況に対応できる確かな英語力を身につけて貰いたいと思います。しかし、この大きな変化の中で、我々教員が上手く対応できず、生徒に混乱をもたらせば、全くの逆効果にもなりかねません。奇しくも、今年度の兵庫県高校生英語ディベートコンテストの論題は、「日本の全ての小学校は外国語活動を廃止すべきだ」です。英語教育の過渡期で学ぶ高校生は、今の英語教育に何を思い、どんな議論を交わすのか、少なからぬ不安を覚えつつも、非常に楽しみにしています。

発信へつなげる授業

中村邦彦

(長野県松川高等学校)

1. 中学校から引き継ぐ指導

現在行っている高校では、以前感銘を受けたある中学校の活発な授業を参考に、授業を組み立てている。ここでは、中学校から引き継いで、高校でどのような授業展開をしているのか、主に「教科書本文を活用した指導」の観点から紹介したい。

参考に行っている指導の8つのポイント

- ① 1時間の授業で生徒の口からどんな英語がどれほどの分量飛び出すかを大切にす。
- ② 自分の世界の出来事について英語で語らせる。
- ③ 「言葉はキャッチボール」なのだから、生徒と生徒、教師と生徒が授業中に作る言葉がキャッチボールになっているかを意識する。
- ④ 「文字を見なければ頭の活動が機能しない」では英語は身につかないので、文字に向き合うばかりの授業にしない。
- ⑤ 反応速度を高める。すべての活動においてスピードを意識する。
- ⑥ 教師ではなく「生徒がリード」する授業をする。
- ⑦ 間違いを恐れず使い続ける。
- ⑧ 「授業で使えないものは「外でも使えない」ので、たくさん授業内で使わせる。

2. 本文を活用した語句の導入

高校になると、さらに多くの単語、難しい語句が登場する。その導入の際、日本語訳との一対一の対応ではなく、中学校で触れてきた語句・文法をベースにし、文脈から推測して見つけさせるようにしている。たとえば、以下のような日本語訳を与え、生徒には本文から英語で語句を抜き出す作業をさせる。生徒が主体的に目を動かして英文を見ることか

ら始める。(ここでは何度も覚えて使うことに精力を傾けるため、辞書の使用は控えている。)

1. 成長して働く(大きくなって働く)
2. ~であるほど十分に大きい

その後全員で確認をするが、確認作業では生徒に司会進行をさせ、他の生徒との間で次のやりとりを行わせる。

司会: Can you answer the questions from No. 1 to No. 5, Satoko?

Satoko: Sure! No. 1 “成長して働く” is “grow up to work.” No. 2 “~であるほど十分に大きい” is “big enough to.”.....

(教師が答えを板書)

司会: Thank you, Satoko.

Satoko: You're welcome.

司会: Can you answer the questions.....

このように、答えの確認の際も、生徒に主体的に英語を使わせ、やりとりをする機会を与えている。

3. 本文を活用した文法の導入

かつて文法指導は、文法の「準教科書」を使用してきたが、定着はあまりよくなかった。そこで普段のリーディング用テキストを加工し、意識づけをさせる。それぞれの英文に1か所の誤りを作り、訂正させることで、文法に「気づかせる」作業をする。

① In the 1950s all the boys in Coalwood grow up to work in the mine, and Homer Hickam thought he would, too.

② The only way to escape was to enter college with a football scholarship, but Homer wasn't big enough be a football player.

併せて生徒に次のような活動をさせる。

司会：Can you answer the questions from No. 1 to No. 5, Taro?

Taro: Sure! No. 1, We should say “grew” instead of “grow”.

また、語順を意識したトレーニングも文法の定着には有効である。1文ずつの並べ替えもよいが、文脈の中で活動させることで定着を図る。

In the 1950s all the boys in Coalwood grew up to work in the mine, and Homer Hickam thought he would, too. ①逃れるための唯一の方法 (way The only to to was escape) enter college with a football scholarship, but Homer ②～であるほどじゅうぶんに体が大きくなかった (be big to enough wasn't) a football player.

4. 本文の読み

教科書の音読は、英語学習に欠かせない。中学校でたくさん体験しているであろう音読を、高校の授業でもしっかり取り入れている。しかし、様々なハードル（知識不足、練習不足、定着不足、日本語運用能力の不足）のために音読が困難で、意味を考えながらスピードを上げて読解するまでの余裕がない生徒もいる。意味を考えさせながらの音読にするため、また、スピードを上げた読解につなげるため、以下のような「虫食いプリント」を作成している。これは、単語の initial のみを示した読解プリントで、1人が穴埋めをしながら音読、もう1人が確認役でサポートする。単語編とフレーズ・文法編を用意し、1レッスンで6回ほど練習。回を増すごとに initial を減らしたり、日本語の一部を消したりしてハードルを上げる。

The boy's science teacher, Ms. Riley, never諦めた (g) (u) hope for her students. She told Homer, “Sometimes you really can't listen to 誰かほかの人がいうこと (w) (a) (e) says.

また、長文の読解の場合、文法などの細部にばかりとらわれないで、大きく内容をとることも大切である。質問に対する答えの部分に下線を引かせる作

業を通して、内容を読ませる練習を行っている。

Question1: When did Homer decide to build a rocket?

(以下、教科書本文)-----

In the 1950s all the boys in Coalwood grew up to work in the mine, and Homer Hickam thought he would, too. The only way to escape was to enter college with a football scholarship, but Homer wasn't big enough to be a football player.

Then one day in 1957, everything changed. Sputnik, the first Soviet satellite, flew across the October sky — and Homer made up his mind to build a rocket.

5. 本文を利用した自己表現の練習

本文を訳読する代わりに、生徒に覚えて使ってほしい文章をいくつか取り出し、何度か話す練習をさせる。その後、自分に置き換えて表現させることで、自分を英語で語る体験をさせている。

But his father still refused to come to the launching.

①一息で5回読めるまで練習する。

②下線部を使用して、自分のことについて語らせる。

6. おわりに

これからの英語教育では「生徒に活動させる」だけでなく、「生徒に発信させる」までのプロセスをきちんと指導者が考えねばならない。それには、本文を読んだから、本文を振り返るような活動が必要だ。生徒が「自分を語れない」のは、発信するために情報を獲得しながら本文を読む、という授業・習慣になっていないためだろう。「目的を持って読む」というのは、従前から言われてきたことだが、これからの授業の中では「発信させるための情報を獲得・定着させるための本文の読み」という視点で読ませたい。これは中高を通しての課題ではないかと考える。

【引用文献】
三省堂 (2012) 『Rocket Boys』 [VISTA English Series New Edition II Step One] pp.52-56

特集 高校の英語の授業を知らう

高等学校の授業への橋渡しとなる中学校での授業改善
—コミュニケーション能力の基礎から活用へ—

後藤喜朗

(岐阜県岐阜市立東長良中学校)

1. はじめに

2009年3月に高等学校学習指導要領の改訂が公示され、「外国語科」では、「コミュニケーション」という名称がより多く使用されるようになった。また、「授業を実際のコミュニケーションの場面とするため、授業は英語で行うことを基本とする」と明示されたことも改訂の方向性に沿ったものである。

こうした改訂の趣旨を前提に、高等学校を見すえた中学校での授業改善のポイントについて述べる。

2. All English の授業と Classroom English の充実

高等学校での「授業は英語で行うことが基本」を視野に入れ、教師自身が All English での授業を目指した。教師は、学習者にとって一番身近なモデルである。そこで、教師自身が英語力を磨くことに日々精進している。通勤の車の中で英会話を聞いたり、英検に挑戦したりするなど、英語教師としての専門性を鍛えることが大切であるとする。

また、本校では「教科シラバス集」を作成し、授業中に使える Classroom English を生徒に示した。この「教科シラバス集」には、各教科の学び方と年間の学習内容の見通し、目指す発言形式や反応の仕方などを掲載している。

生徒は、この「教科シラバス集」を、学習活動中に机の上に準備したり、教科のノートに貼ったりして、自分が発言する際に活用できるようにしている。また、学習活動前には教科係が「教科シラバス集」をもとに話し方・聞き方を確認している。

なお、生徒から「家庭学習の仕方が知りたい」という要望が出されたため、「予習・復習の方法」を新たに「教科シラバス集」に位置付けた。

教科シラバス集(岐阜市立東長良中学校編)



教科シラバス集「英語ならではの話し方(例)」

- ・ I have another idea. ・ I add something to ~.
- ・ Today I'll talk about ~.
- ・ I'll say that in my words.
- ・ I think so, too. ・ I don't think so.
- ・ I agree with ~. ・ I disagree with ~.
- ・ That sounds good / interesting / great.
- ・ In my opinion ~. ・ I see your point, but ~.
- ・ I know what you mean, but ~.
- ・ That may be true, but ~.
- ・ I don't understand what he said but ~.

このように、「教科シラバス集」を活用し、自ら学んだ体験が、高等学校進学後の「自学」につながるのとらえる。

3. 「帯活動」における「聞くこと」「話すこと」の位置付け

高等学校で「コミュニケーション」がより重視されるようになったことを受け、本校では、授業の最初の約10分間を「帯活動」とし、「聞くこと」「話すこと」を中心としたコミュニケーションを図る活動を位置付けている。具体的には、ペアで昨日の出来事について対話をしたり、1分間スピーチに対するQ&A活動を位置付けたりしている。本校では、年間を通して「帯活動」に取り組むことで、中学校で

の英語科の学習における基礎的・基本的な知識・技能が確実に定着することを目的している。

基礎的・基本的な知識・技能を身に付ける「帯活動」の例

○ One Minute Talk

(1分間ペアで対話をする活動)

- ・トピックは、“What is your favorite food?” “How was your school trip?” など。各単元の題材や言語材料に関するものを扱う。

○ Show and Tell

(具体物を示しながら、スピーチを行う活動)

- ・スピーチの内容に関して Q&A 活動を行う。
- ・トピックは、自己紹介、他者紹介、家族紹介、夏休みの思い出、私の夢などを扱う。

4. 「伝え合う活動」と「理解・練習する活動」のバランス

中学校でも高等学校でも外国語科における授業改善のポイントは、言語活動の充実である。そのための方途の1つが、中学校学習指導要領の「言語活動の取扱い」に、『実際に言語を使用して互いの考えや気持ちを伝え合うなどの活動を行うとともに、言語材料について理解したり練習したりする活動を行うようにすること。』と述べられている。

高等学校への橋渡しのために中学校の英語科教員には、「伝え合う活動」と「理解・練習する活動」のバランスを考慮し、中学校3年間を通して「確実に」かつ「効果的に」実践することが求められる。例えば、mechanical drill や既習事項の meaningful drill を通して言語活動の定着を目指したり、単元の終末の活動のあとに、別の話題でコミュニケーションを図る活動に取り組んだりすることが大切である。

このように、「伝え合う活動」と「理解・練習する活動」を効果的に実施し、「正確さ」と「適切さ」の両面を鍛えることが、高等学校へのスムーズな接続につながると考える。

5. 中高での授業交流及び授業研究会での意見交流

本校では、隣接する公立高等学校と日常的な交流

を行っている。特に、研究授業の際には学習指導案を交換し合い、授業を見合い、研究会で意見を述べ合うという取組を行ってきた。

また、高等学校1年生の授業に中学校教員が、中学校3年生の授業に高等学校教員がゲストティーチャーとして参加をする取組も行っている。特に、中学校教員は、高等学校教員の語彙の豊富さ、表現技能の高さに大きな刺激を受けたようであった。

このように、中高での指導計画や学習指導案の交流だけに止まらず、実際の授業を見合うことを通して、各々の実態をよりの確に把握できるようになった。そのことが日常の授業で使用する語彙や言語材料の見直し、言語活動の改善につながっている。

さらに、高等学校に入学すると、「英語表現Ⅰ・Ⅱ」という科目が始まる。そこで、中学校3年生の後半にディベートやディスカッションの活動を位置付け、この「英語表現Ⅰ・Ⅱ」への導入となるように指導計画の改善を図った。

6. 終わりに～百聞は一見にしかず～

こうした取組を経て、中学校での授業改善には、下記の3つのファクターが必要であると言える。

- 高等学校での指導目標、指導内容、指導方法の把握
- 高等学校の生徒の実態把握
- 中高の教員間の協力体制づくり

今後は、中高の連携を基盤とし、校区の小学校とも一層の連携を図りながら、効果的な小中高の連携の在り方を究明したい。

なお、本校は、岐阜県の研修校として、毎年、授業を公開している。ぜひ、高等学校を見ずえた具体的な授業実践を参観していただき、ご指導・ご示唆を賜れば幸いである。

公開研究会のご案内

岐阜市立東長良中学校「わが校報告会」
日程：平成25年11月15日(金)
場所：岐阜市立東長良中学校

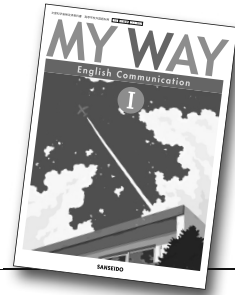
電話：058-294-1782 / FAX：058-294-1784
http://cms.gifu-gif.ed.jp/h-nagara-j/
E-Mail：gichu21@e-nagara-j.gifu-gif.ed.jp

特集 高校の英語の授業を知ろう

[コラム]

これが高校の英語教科書だ

三省堂 高校英語教科書編集部



1. 高校英語教科書の改訂のポイント

今年の4月から、高等学校において「新学習指導要領」における教科書での授業が始まりました。「新学習指導要領」を踏まえて教科書を作成するときの主な観点は、次の各項目です。

1. 科目構成の変更
2. 学習指導要領の下限規定
3. 語彙数の増加
4. 伝統文化と自然科学の追加
5. 文法項目の科目指定
6. 英語で授業を行うことを基本とする

ここでは、上記の観点を踏まえて教科書がどのように改訂されたのかを、「コミュニケーション英語」の教科書『MY WAY English Communication I』を例に説明します。

2. 『My Way English Communication I』の構成

① 本課の前の Starter

「コミュニケーション英語基礎」（中学の学習事項の復習）が科目として新設されている状況と、これまでの中学の学習指導要領が「聞く」「話す」活動に重点がおかれてきたことも踏まえ、本課に入る前段階として、高校での授業でよく出てくる最低限の文法用語や基礎項目などを整理する Starter を設けることとしました。中学3年間すべての学習を扱うことはできませんが、中でも大切と思われる項目（品詞、自動詞と他動詞、文型と語順、句と節、辞書の引き方）を絞って扱っています。

② (本課)Pre-Reading

新学習指導要領ではなるべく英語で授業を進める方向性が示されていることもあり、課の扉のページ

には、「Before You Read」を設けました。これは本課に入る前に、それまでに生徒がもっている課の題材に関する背景知識などを、写真等を見ながら、教師と生徒とのインタラクションで引き出そうとするもので、英語の簡単な設問が用意されています。

③ (本課)While-Reading

本課の紙面構成は、左ページが本文、右ページが活動と、授業の1時間の学習項目が一目でわかる「見開き構成」とられています。

本課ページの冒頭には、本文の読みを促すためのリーディングポイントが日本語で示されています。「英語で授業」ということを考えると英語で示すことも考えられますが、それは授業中に先生が英語でできるようにと考えて日本語にしました。

本文の題材は、教育基本法改正に伴っての「伝統文化」に関するもの、理数に関心をもたせるための「自然科学系」のものが新たに意識されています。

また、脚注には本文の内容をたずねる英問英答のQ&Aが用意されており、ここで内容の基本的な理解を押さえることができます。

さらに傍注には新語が掲載されています。新学習指導要領では、学習する語彙数が大幅に増え、中学で300語、高校で500語が従来の教科書よりも増えました。語彙力も大事な基礎力なので、語彙に注意を喚起させるために、「発音注意」「つづり注意」「アクセント注意」のマークがつけられています。

右ページには、「内容理解」「文法」「基本問題」「Reading Skill」が用意されています。「内容理解」としては、最終的には要約文の全文が書けるところまでを目標に、その前段階としての穴埋め問題や表での情報の整理、会話形式における内容の把握など形式を変えながら提示しています。

また、活動をするにあたっては「文法」を十分に

Lesson 2

Shoes for a Dream


Section 1

高橋さんはなぜこのプロジェクトに参加することにしたのでしょうか。


One day in May 2009, Takahashi Naoko went to Kenya. She visited an area in Nairobi. People call that area Kibera. There, many children have no shoes. For those children, Takahashi brought a lot of shoes from Japan.

She went there as a member of the Smile Africa Project. They collect used shoes and hand them out to children in Kenya. As a runner, shoes mean a lot to Takahashi, so she joined the project.

Kenya was familiar to Takahashi. She often competed with Kenyan runners in international marathons. However, at that time, she did not understand the reality of the country. Actually in some parts of Kenya, shoes have great value.



シドニー五輪(2000年)



靴の提供を呼びかける高橋さん

◆ Kenya [kə'ni:ʃə]

◆ Nairobi [naɪ'rəʊbi]

◆ Kibera [kɪ'bɪərə]

used [ɪ'zʌd]

runner [ˈrʌnə]

familiar [fə'mɪljə]

competed [kəm'petɪd]

marathon(s) [ˌmærə'thɒn(s)]

◆ Kenyan [kə'njan]

international [ˌɪntə'næʃənəl]

marathon(s) [ˌmærə'thɒn(s)]

however [haʊ'evə]

reality [rɪ'ælɪtɪ]

value [vælju]

1. Did Takahashi visit Kibera?

2. What do the members of the Smile Africa Project collect?

3. Why was Kenya familiar to her?

1 2009 = two thousand nine 4 Kibera キベラ(ナイロビ市内の一地区)
 7 Smile Africa Project スマイル アフリカ プロジェクト 8 hand ~ out ~ を手渡す The teacher handed books out to them. 9 mean a lot to ~ ~ にとっても重要である
 10 be familiar to ~ ~ ~ になじみがある The song was familiar to us. 12 compete with ~ ~ と競う

Read Again

本文の内容に合うように() に入る語を下から選んで、書いてみましょう。

Takahashi visited Nairobi. She brought (1) from Japan. In the Smile Africa Project, they collect (2) shoes and hand them out to (3) in Kenya. She did not (4) the reality of the country.

[used / runner / understand / shoes / children]

Grammar

● 「～を…と呼ぶ」= [S(主語) + call + O(目的語) + C(補語)]

People call that area Kibera.

◆ 動詞(V)にはcall以外に、name「～と名づける」、make「～にする」、keep「～に保つ」などが使えます。
 例) He named his daughter Nanako.
 The news made everyone happy.

補語(C)が目的語(O)の説明をするような関係になるんだね。

TRY!

意味がとおるように()内の語句を並べかえて、書いてみましょう。

1. I (Kiki / named / my cat).
2. The wind (the room / makes / cool).
3. We (clean / keep / the kitchen).

Reading Skill

第3段落(㉔.11～)を読みながら、形容詞を□で囲み、副詞に下線をつけましょう。

例 There many children have no shoes.

● 形容詞や副詞がわかると、より具体的な内容がとらえやすくなります。

本課の本文ページ (配当：1 見開き 1 時間)

理解することは必須ですので、教科書ではいかにわかりやすく簡潔に提示することができるかがポイントとなります。なお、「文法」については、課間にも5箇所「文法のまとめ」として鳥瞰的に、<英語と日本語の語順>、<過去分詞のいろいろ>、<toのいろいろ>、<ingのいろいろ>、<ifのいろいろ>などの項目が扱われています。

なお、文法項目においては、従来は指定がありませんでしたが、今回は「コミュニケーション英語Ⅰ」に8つの文法項目(1 不定詞 2 関係代名詞 3 関係副詞 4 助動詞 5 代名詞のうちitが名詞用法の句および節を指すもの 6 動詞の時制 7 仮定法 8 分詞構文)の全部を扱うことが明記されました。

また、Reading という科目がなくなり、「コミュニケーション英語」の中に吸収されたため、従来は3年生で履修する機会が多かった Reading Skill (読み方のコツ) を「コミュニケーション英語Ⅰ」から扱っていることも今回の改訂の特徴です。

④ (本課) Post-Reading

課末には、課全体の「内容理解」のための問題として、リスニング問題と Summary (穴埋め) と Reading 活動としての「音読」、さらには、新学習指導要領の改訂のきっかけとなった、日本人が弱いとされている経済協力開発機構(OECD)の「PISA型読解力」の発問例を各課に用意しました。

また、語彙数の増加に伴う「語彙力の増強」のための一環として語彙に関する問題を設け(Words)、新出語彙をゲーム感覚で楽しみながら定着させられるように、問題も5種類のバリエーションで作成しました。なお、課間にも語彙を増やすための工夫として Vocabulary Building のコーナーを設け、<接頭辞>、<接尾辞>、<品詞の区別>、<基本動詞のイメージ>などを扱っています。

さらに、「文法」「表現」等の確認問題ほか、課を終えた後には、本課の題材のテーマに関連した自己表現活動、ゆくゆくは大学入試の自由英作文につながるための Self Expression が用意されています。

授業マネージメントの勘どころ： 指導言の改善を求めて (2)

田邊 祐司 Tanabe Yuji
(専修大学)

1 はじめに

前回は発問、指名、指示といった指導言に関する熟練教師3名の勘どころを概観しました。今回は、授業の要とも呼べる「説明」を取り上げ、彼らが説明にいかなる工夫を施しているのかを紹介します。

2 説明というカンナがけ

「説明」を英語でいうと、もちろん explanation ですね。語源には「カンナ (plane) をかけて、完全に (ex) 平らにすること」とあります。つまり、カンナを使うように、生徒が教材内容を理解しようとする道程をツルツルにしてあげることがこの言葉の本義といえるのです。カンナがけが必要となるのは、1) 発音、2) 文法事項、3) 語や連語、慣用表現、4) 文の意味や構造、5) 文と文との関係、6) パラグラフやひとつの課全体などの意味や要旨、7) 教材に関係ある文化的背景、8) 日英両語の発想や考え方の違い、などの指導過程が考えられます(垣田 編 1981)。

こうして見ると、その頻度と内容から、説明が授業を成立させるための欠かさざる重要な授業行為であるということに改めて気づきます。しかし自戒を込め述べますと、ともすれば教え込もうとする余り、一方通行的にしゃべりまくって、いつの間にか生徒を置いてけぼりにすることがあります(自戒を込め!)。理解の過程をツルツルどころか逆にデコボコ(凸凹)にしては元も子もありません。当然、3名の教師は「説明」というカンナがけを授業マネージメントの大きなポイントとして押さえています。

3 インタラクティブなカンナがけ

カンナのかけ方は演繹的なものと帰納的なものとに大別できます。どちらがどうだ、という二分法で

はなく、私たちは授業目標、配分、時間、生徒のレベル(しばしば直感も!)などに応じて、カンナのかけ方を変えていると思います。この要所で3人に共通しているのが、しゃべり倒して煙に巻くという手法はほとんど用いないということです(ちなみに英語には long-winded という表現があり、school teacher の代名詞になっています!)

C先生は、文法事項であろうと文構造であろうと、一方的に説明する手法は採りません。先生のいう説明は、生徒の既知知識を喚起しながら、発問、指名、例示などでゆさぶりを繰り返す、所定の項目を彼ら自身が学びとるようにする手法です。この間、生徒の反応を注視し、どこまで理解しているのかを測りながら、その仕方を変えていきます。そして最後は生徒自身が「あー、わかった!」と納得するようなカンナがけを心がけているのです。C先生は教師が中心に行う説明というものすらインタラクティブなものに変容させているのです。

A先生は基本的にはC先生と同じ“インタラクティブ派”なのですが、彼の場合、さらにイラスト、図、写真、記号や写真などをふんだんに使いながら、理解過程をツルツルにする工夫をしています。これは口頭だけの説明では限界を感じるようになったという自身の体験からだそうです。

A先生は「話だけではよく理解できない生徒が増えてきている気がします。TVでも日本語で語っているのにやたらテロップが入っていますよね。あれはおそらくこうしたケータイ年代の聞く力の欠如をTV局側が敏感に感じ取っているからではないでしょうか。」と話してくれました。

視覚情報に依存する傾向がある現代っ子を逆手にとったA先生のこの手法は、1年間美術部に出入りし、デザインの基本を部員とともに徹底的に学んだ

成果だそうです。また先生は英語教師が他教科の同僚の授業を参観することも奨めています。社会科では生徒に身近な事例を使いながら今の社会をつかませようとするし、数学科の記号となったロジックを用い、多言を要さないコンパクトな説明法には英語科教育も見習うべきものがあると考えています。

4 ワークによるカンナがけ

B先生の「説明」で特徴的なのが、説明の代わりに作業(work)をさせるというものです。例えば辞書引き。語彙、文法・語法、文化などの項目を説明する場合、先生は口頭であれこれと言わず、辞書引きという作業に生徒を誘います。彼らが先生の“Look it up in your dictionary!”の指示と同時に辞書を引き始める様は壮観でさえあります。

数量形容詞“many”の用法の例では、日本語の「多数の、多くの、たくさんの」という意味からの干渉(negative transfer)により、生徒の多くが“Many students...”という英文を産出することがあります。これに対してB先生は、「manyは～である」という公式的な説明、すなわち答えを提示するのではなく、辞書という「言葉の銀行」に一緒に行って調べようという形を大切にしています：

『初級クラウン英和辞典』で“many”を引くと、「特に話しことばでは、manyはふつう疑問文・否定文で使われる；肯定文で使うと形式張った感じになるので、manyの代わりに a lot of, lots of, plenty of, a great many などを使うことが多い。」という記述があります。

この記述を最初に発見した生徒にその部分を読ませ、全員にマーカーでチェックを入れさせます。さらに例文をみると、確かに疑問文や否定文での用例があり、“many”が使われるのは疑問文や否定文に多く、肯定文(特に話し言葉)ではあまり使われないことを理解してくれます。こうした作業を説明と呼んでいいかどうかは心もとないのですが、このように一緒に調べてみるという過程を取り入れるようになってから、生徒の理解度、英語への興味は目に見える形で変化してきました。もちろん田邊スクールの一

員として、最後には辞書に付せん紙を貼らせ、辞書を太らせています！(笑)

5 メディアによるカンナがけ

C先生もまた、共同作業的な説明を優先していますが、違うのは歌、映画、sit-comなどのメディアを活用し、それらの視聴から生徒に気づきを起こさせ、項目を理解させる手法をとっていることです：

“will”と“be going to”の微妙な違いを説明する場合には、まず「英語のプロポーズの言葉は？」という発問からはじめます。そしてその場面を集めたビデオクリップをいくつか視聴させます。“marry me”という表現の解説はもちろん必要ですが、ペアでガヤガヤとやらせているうちに、生徒はやがて“Will you marry me?”と言っていることに気づきます。そこから人の意思が強くなるwillの意味をつかまさせます。

次に「じゃあ“Are you going to marry me?”というのはプロポーズのときに使うのだろうか？」という発問でさらに考えさせ、最後は“will”と“be going to”の押さえにかかると。この間、「意志未来」とか「近接未来」という用語は使いません。あくまで彼らの知性と感性に訴えかける形の働きかけを説明としてとらえています。

6 おわりに

3人が勤どころにしているのは、教師がしゃべり倒すような説明手法ではなく、むしろ生徒を巻き込む形の説明のあり方でした。彼らの授業を見学したあと、説明の仕方にはまだまだ改善の余地があることを痛感し、なぜだかノーベル文学賞作家 Patrick White (1912-1990)の言葉を思い出しました。

“I forget what I was taught.

I only remember what I have learned.”

【参考文献】

垣田直巳 編 (1981). 『英語科重要用語 30 の基礎知識』明治図書出版。
田島伸悟・三省堂編修所 編 (2012). 『初級クラウン英和辞典 12版』三省堂。



単語テストはどう作る

根岸雅史 Negishi Masashi
(東京外国語大学)

1. 単語テストは必要か

たいていの定期試験には単語の知識を単独で問う問題が含まれている。いわゆる「単語テスト」である。これには、様々な理由が考えられる。1つは、英語の教師の多くが、単語の知識を、英語力を支える主要な要素の1つと考えていること。また、学習の観点からいえば、単語というのは、学習者にとって、ある意味わかりやすい学習対象であること。さらには、観点別評価の「言語や文化についての知識・理解」の評価規準として、単語の知識が設定されることも理由の1つだろう。

しかし、その一方で、単語の知識を単独で問うことにはどのような意味があるのか、もう一度立ち止まって考えてみることは意味のあることではないか。そもそも、現実の言語使用においては、単語の知識が単独で問われることはきわめて限定的であろう。また、多くの単語テストで問われるような知識を持っていたとしても、それらの単語を実際に使えるかとなると話は別である。

国内外の代表的な英語能力テストの中には、こうした単独の単語テストが依然として存在しているものもあれば、かつては含まれていたが、すでに姿を消してしまっているものもある。「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」といった4技能のテストがあれば、当然これらのテストの中にも単語が含まれているわけで、「単語テスト」が単独で存在しなくてもよい、という考え方は十分に成り立つ。

では、もし単独の単語テストが必要だとすればそれは何のためだろう。単語テストに何らかの意義があるとすれば、それはおそらくテストが持つ診断的な機能ではないだろうか。「聞くこと」「話すこと」「読

むこと」「書くこと」がうまくいっていない場合に、単語テストを併用することで、さらに踏み込んで、問題は単語の知識の欠如なのか、文法の知識の欠如なのかなど、診断的に診ることができる。

2. 単語テストの問題点

語彙習得研究の文献を読めば、単語を知っていることとはどういったことかという議論が必ず展開されている。代表的なところを挙げれば、

- ① 意味を知っていること
- ② 使うことができること
- ③ コロケーションを知っていること
- ④ 語法を知っていること
- ⑤ ニュアンスがわかること
- ⑥ 語の構成要素の知識があること

等々といった具合だ。

しかしながら、定期試験においては、日本語の訳語を書かせたり、絵と結びつけたりするような問題が圧倒的に多い。これは、上の分類の①を問う問題である。他には、同義語・反意語を探すとか、仲間はずれの単語を探すとといった問題もあるが、現状において、定期試験で測定されている単語の知識は、かなり限定的であると言える。

もちろん、限定的であっても、それが指導目標や評価規準と合致していれば問題ないだろう。しかし、指導目標や評価規準に対応した単語知識を測定するテスト方法のレパートリーがないために、目的に合った測定ができていないとなれば問題である。

こうした問題の他に、現状の単語テストには、文脈の欠如という問題もある。定期試験においては、空所補充問題を別にすれば、多くの場合文脈がない。つまり、単語を単独で問っているのである。しかし

ながら、中学で指導する単語の多くは多義語であり、文脈がなければ、語義が定まらない単語がかなりある。ある定期試験では、「then を日本語にきなさい」という問題が出ていたが、これだけから「そのとき」を唯一の正解とするのはいかがであろうか。確かに、「教科書で学んだ単語の語義で言えば」という隠れた大前提のもとに実施するのであれば、定期試験としては機能するかもしれない。しかし、テストとしての妥当性は問題視されるべきである。基本的には、冠詞・前置詞・接続詞などの機能語や take や make といった多義語などは、文脈の中で問うべきであろう。

3. どの単語を問うか

テストの内容妥当性を考えた場合に、どの単語をテストするかを考えなければならない。定期試験であれば、単語のサンプリングの主たる対象は教科書の単語となると思われるが、問題はどの単語を出すかである。一口に教科書の新出単語と言っても、様々なカテゴリーがある。NEW CROWN で言えば、WORDS 欄に太字で示されている「最重要語」(500語)と、並の太字で示されている「重要語」(700語)と、日本語の語義の書いてある単語とがある。大枠としても、この中のどのカテゴリーの単語を出題するかを決めなければならない。さらに、それを決めても、実際には、そこに含まれる単語のすべてを問うわけにはいかないで、何らかのサンプリングを行うことになる。だとすれば、そのサンプリングは、ランダムに行うのか、出現頻度の高いものとするのか、(何らかの)重要度に基づくのか。いずれにしても、「適当に」選ぶのではなく、何らかの方針に従って行うべきである。

4. 音声による単語テスト

発表語彙と受容語彙ということを考えるならば、どれが意味がわかればよい単語で、どれが正しく書けたり、言えたりする必要のある単語かなども決めておく必要がある。もちろん、このことは生徒とも共有しておく必要があるわけで、指導の中で、教科書の中のどの単語は書けなければいけないのか、また、どの単語は(当面は)意味がわかるだけでよい

のかを知らせておく必要がある。NEW CROWN で言えば、「最重要語」は正しく書いたり、言えたりすることを求めるが、「重要語」は意味がわかればよく、それ以外の単語は単独の単語テストでは問わない、といった具合である。

単語のテストとなると、いきおい単語を書かせたり、書かれた単語の意味を表す選択肢を選ばせたりしている。ただ、これらは、「4技能」という観点から見れば、前者は「書くこと」、後者は「読むこと」であることに気がつくだろう。しかし、少し考えればわかるように、単語の知識というのは、文字言語に関するものばかりではない。だとすれば、多くの単語テストは、この点、バランスを欠いていると言える。

こう考えれば、単語の知識を「聞くこと」や「話すこと」という音声に関わる技能として評価することも、それほど突拍子のない考えには思えないだろう。たとえば、曜日などには綴りと発音の関係が、かなり例外的なものもある。Wednesdayなどは典型的な例だ。このような単語の場合は、聞いて意味がわかったり、口頭で言うことができるけれども、正しい綴りを書くことはできない学習者も、初期の頃は少なくないかもしれない。授業では、日にちや曜日を言うことができるのに、テストではこれらの単語を「書かなければならない」となると、授業で行っていることとテストされていることがずれている可能性がある。

もちろん、これは、評価規準の「言語や文化についての知識・理解」に、「単語の知識」がどう記述されているかによるだろう。Wednesdayであれば、これが正しく綴れないだけなのか、言うということもできないのかなどは、分けて評価したほうが、その後の指導や学習にも活かせる。もし言えればいいのであれば、カレンダーを見せて、それぞれの曜日をランダムに指し、言わせればいいだろうし、聞くことができればいいのであれば、ある週の日になち曜日を見せておいて、曜日を音声で聞かせ、その曜日の日にちを書かせるということでもいいだろう。要するに、単語テストでも、見るべき能力とテスト方法を合致させることが重要である。

『5つの提言』を受けて、 今やるべきこと(2)

—ジャンル準拠指導を生かしたWriting指導の一実践



大岩 樹生 Ohiwa Tateo (新潟県新潟市立白新中学校)

1. はじめに

Writingの課題において、「先生100語以上書いたよ!」と言う生徒に、「よく書いたぞ、偉い」と返す。このような経験はないだろうか。しかし、よい文章は量にも量だけでは決まらない。目的に合わせ、量的にも質的にも「適切さ」があるはずである。今回は、Writingの指導に焦点を当てた実践を紹介する。

についてのスピーチ原稿を書くという課題を設定した。指導に当たっては、次の手順で行った。

- (1) 目的の共有
- (2) 教科書本文の分析と評価基準の共有
- (3) 学習タスク×2
- (4) 評価タスク

以下、それぞれの指導の具体について記述する。

2. 実践のきっかけ

複数の教科書において、NEW CROWN Book 1のLESSON 8 “School Life in the USA”のような「他国の中学校のカリキュラム等の紹介」やBook 3のLESSON 6 “I Have a Dream”のような「偉人紹介」といった題材が扱われている。

その際、単元の終末に、NEW CROWNにあるMini-projectのような統合型のタスクが用意されており、本文を参考にし、自分の状況にあった文を作成する表現活動が設定されている教科書もある。例えば、NEW CROWN Book 1のLESSON 8であれば、自国の中学校のカリキュラムに合わせて、“I am studying English. It is my foreign language. I like it. I study English four times a week.” (下線部は置き換えた箇所)のように置き換えるといった具合だ。SpanishをEnglishに置き換える程度であれば簡単だが、「偉人紹介文」を書かせるということになると、話は別だ。どのように指導すべきか、見当すらつかなかった。

そこで、新潟大学教育学部の松沢伸二教授にジャンル準拠指導について指導を仰ぎ、本実践を行った。

3. 指導の実際

Book 3のLESSON 6 USE Mini-project「尊敬する人物を紹介しよう」において、尊敬する人物

(1) 目的の共有

本単元の課題を提示した際、2年生の英語教員から3年生の生徒に、次のような依頼をもらった。

「Book 2のLET'S READ 2 “Landmines and Aki Ra”を読んだ後、簡単な偉人についての紹介文を書かせたいのだが、君たち3年生の原稿を見本として2年生に示したい。」

これにより、「読み手」は「後輩」で、「目的」は「後輩にレポートの見本を示すため」という確認がなされ、活動がスタートした。

(2) 教科書本文の分析と評価基準の共有

Book 3のLESSON 6 USE Mini-project「尊敬する人物を紹介しよう」では、最初にジョージと由美の「私の尊敬する人」というタイトルのスピーチを聞き、情報を表にまとめるという課題を課している。ジョージはキング牧師、由美は登山家の田部井淳子さんについて「生まれた場所・年」「何をした人か」「尊敬する理由」等について発表している。以下は、田部井淳子さんについてのスクリプトである。

Hello, everyone. I'm Yumi. Today I'm going to talk about the person I respect.

The person I respect is Ms Tabei Junko. She was born in Fukushima Prefecture in 1939. She played an important part in the history of climbing. She was the first woman that stood on the top of the highest mountain in the world. She also climbed the highest

mountain on each of the seven continents.

I respect Ms Tabei because she never gave up climbing in difficult times. One thing I learned from her life is the importance of courage and patience. Thank you.

[98 words]

キング牧師についてのジョージの発表原稿のスク립トともに上記を生徒に示し、Opening, Body, Closing のパラグラフとその内容について問うた。生徒の分析から、構成を以下のように確認した。

Opening : 挨拶, スピーチの案内

Body : 偉人の経歴, エピソード

Closing : 尊敬する理由, 挨拶

ここで、次のように問うた。

“You think this is a good report. But ... is this really good?”

生徒は戸惑いながらも、不十分だと思われる点を探すために、何度も熟読した。その結果、多くの生徒が以下の点に気付くことができた。

尊敬する理由につながるエピソードがない。

これにより、Body を 2 パラグラフとし、1 つ目はその人物の基礎的な情報について、2 つ目はその人物を尊敬する理由につながるエピソードを記述することとした。その他にも「一番高い山の名前が分からない」「いつ山に登ったか分からない」「今も健在なのか分からない」といったコメントがあり、これらをまとめて「5W1H についての情報が不足している」とまとめた。

これらの指摘を受けて、教科書スク립トをリライトし、生徒に以下の文章を提示した。

Hello, everyone. I'm Yumi. Today I'm going to talk about the person I respect.

The person I respect is Ms Tabei Junko. She was born in Fukushima Prefecture in 1939. She played an important part in the history of climbing. She was the first woman that stood on the top of Mt Everest in 1975 which is the highest in the world. It is 8,848

meters high! She also climbed the highest mountain on each of the seven continents.

When she was trying to climb Mt Everest, her tent was broken by a big snowslide. Fortunately, nobody died and she was helped by members of other tents. Everyone said, "We should stop climbing!" But she never gave up. Finally, she made it!

I respect Ms Tabei because she never gave up climbing in difficult times. She is 73 years old now, but she still climbs some mountains every year! One thing I learned from her life is the importance of courage and patience. Thank you.

[165 words]

※下線部筆者加筆

上記の文章を読み、「尊敬する人物」というタイトルでスピーチ原稿を書く際の評価基準を、生徒とともに以下のようにまとめた。

項目	✓	基準
項目	<input type="checkbox"/>	Opening, Body, Closing で原稿が構成されている。
	<input type="checkbox"/>	語数は 150 語程度でパラグラフ数は 4 つ。(Opening 1, Body 2, Closing 1)
内容	<input type="checkbox"/>	Closing の尊敬する理由を裏付けるエピソードが Body で述べられている。
	<input type="checkbox"/>	5W1H の情報が適切に入っている。
言語	<input type="checkbox"/>	関係代名詞を用いている。

また、ジョージと由美の発表原稿スク립トを見ながら、どの偉人を紹介しても同様に用いられそうな表現 ([IDEA BOX], p.75, Book 3) を確認した。

(3) 学習タスク×2

《学習タスク1》

上記の基準に従い、メジャーリーガーのイチローを例に「私の尊敬する人」のスピーチ原稿を書くという学習タスクを課した。生徒には、Web サイトにあったイチローについての基本的な情報と、彼が人一倍道具を大切に扱うというエピソードとを、一緒に提示した。

生徒はこれを見て、次のような構成を考え、辞書を用いながら、「私の尊敬する人—イチロー—」の発表原稿を作成した。

Opening : 挨拶, スピーチの案内
Body 1 : イチローの一般的な情報
Body 2 : イチローが道具を大切にするエピソード
Closing : イチローを尊敬する理由, 挨拶

《学習タスク2》

生徒が書いた文章を丁寧に添削し、よく書けているものについて学級全体に紹介した。

次に、自分が尊敬する人物についての発表原稿を作成した。イチローについて一度書いているので、多くの生徒が、学習タスク1ほど時間をかけずに書き終えた。

学習タスク1と2の両方において、常に「評価基準表」を参照させ、条件を満たすように作成させた。学習タスク2においても、生徒の原稿を添削し、教科書本文の分析の際にまとめた自作の「IDEA BOX」に、複数の生徒が用いた「As you know ~」や「play an active part in ~」などの表現を加え、いつでも参照できる一覧にし、配布した。

(4) 評価タスク

最後に、メジャーリーグの選手だったピート・グレイの情報を提示し、次の条件で生徒に発表原稿を書かせるという評価タスクを課した。このタスクは定期テストとは別日に実施した。

- ・辞書、「IDEA BOX」を使用してもよい。
- ・制限時間は45分。
- ・評価基準表は見てはいけない。

ピート・グレイはBook 3のLESSON 1 “My Favorite Words”で紹介されており、また、学習タスク1で同じメジャーリーガーであるイチローについての原稿を書いていることもあり、多くの生徒が最後まで書き終えることができた。

4. 実践の成果と課題

結果的に85%の生徒が、評価基準表の5項目中4つ以上にチェックすることができた。このような結果に至った要因として、以下の2点が挙げられる。

- ① モデリングの工夫
- ② 十分な量の学習タスク

①について：ジャンル準拠指導においては、Modelingから入る。よいモデルを提示し、その構成、内容について共通理解を図る。今回は、教科書のモデルを、あえて不十分な例として提示した。批判的思考力を刺激し、望ましい構成や内容について自ら考えさせるためである。教師側の意図があったにせよ、BodyとClosingの有機的なつながりや150語程度で書くことについては、生徒が自分たちで定めた（と思っている）ので、不満をもらすことなく、黙々と書いた。

②について：目的の共有から、評価タスクまで全部で6時間を費やした。この6時間、生徒はかなりの量の文章を書いた。書くことに慣れ、最後は「IDEA BOX」を見ずとも書ける生徒が多くなっていった。

上記①と②により、指導と評価の一体化が図られたが、評価基準表の内容については、実践を重ねていく中で、加除修正していく必要がある。特に「5W1Hの情報が適切に入っている」について、「適切に」という文言が曖昧であったため、判断できない生徒が複数見受けられた。また、評価タスクの妥当性について精査する必要がある。今回はピート・グレイを扱ったが、生徒の予備知識も含めて、偉人を選択する必要があるだろう。

5. おわりに

私自身、Writingに関する過去の指導を振り返ると、これといった指導もせず、ひたすら書かせ、文法・語彙面のみにかかり添削していたように思う。今回は、ジャンル準拠指導に基づき、活動を設定した。低位の生徒が意欲的に取り組む姿に感動し、今までの無策を反省した。3年生のある生徒は、今回の取り組みについて「毎回自分の文章が良くなっていくのが分かった」や「型が決まっている部分があり、書きやすかった」と述べた。また、3年生の作成原稿を2年生に見せたとき、それらが45分で作成された原稿であり、多くの生徒が160語以上記述していたということに驚き、羨望の眼差しで読んでいた。そして、新3年生の定期テストにおいて、今回3年生が作成した原稿の1つを、Book 2のLET'S READ 2 “Landmines and Aki Ra”とパラレルなテキストとして提示した。

A Club for All Seasons

Robin Sakamoto

(Kyorin University)

Missed Chance?

I remember when I was in junior high school, I decided to try something new. As I had never played a sport, I thought it would be exciting to join the basketball team. For weeks I practiced shooting baskets in our driveway and at the end of the summer vacation went to school to “try out”. In the US, schools have what are called tryouts and students interested in joining a sports team have to go to a number of practices where the coaches observe them and pick the best players for the team. It is the closest thing to passing an entrance exam that I know of in the US. The chosen players’ numbers are posted on the message board and students run to see if they made the team. I will never know if I did or not. On the day the results were announced, I never even went to look. I just knew somehow that my number wouldn’t be there and that was the closest I ever came to playing a sport in the US.

Important Lessons

When I began to teach in Japan, I was shocked at how active all the students were in club activities. Even though I later found out that clubs were mandatory, I have always been impressed with these activities in Japan. I feel they really provide the students with lessons I never learned in school. As only the best players in the US can participate in sports, I missed out on playing at all. In Japan, if you join a club, no matter if you are the best or the worst player, you still get a chance to learn a sport and to find out what it is like to be on a team. I have no idea what it feels like to practice and practice with fellow club members nor what it feels like to win or lose a game. I can watch sports and cheer for a team, but it seems somewhat distant to me as I have no related personal experience.

Secondly, club activities in Japan really are a very special opportunity to develop leadership skills. Although a teacher is

assigned a club activity, there were many times when I saw a club practicing without a teacher nearby. Instead the students themselves think about how to practice, what they need to work on, and encourage each other to do their best. The fact that all of this takes place without a teacher watching over is quite impressive indeed. In the US, a teacher who works as a coach will get separate payment for that and thus is always supervising the students. There is little room for student input other than to follow the coach’s orders.

A Sport for a Season

There are two other big differences between club activities in Japan and sports in the US. First, sports in the US are played for a season with football and volleyball in the fall, basketball and swimming in winter and baseball and track and field in spring. This means that the same student can play three different sports a year or just specialize in one. There are no year-long practices for any sport.

Team players can also take a referee test. For example, a soccer player could take the referee test and then as a part-time job, referee elementary school games. This provides a leadership opportunity for students and they can see the game not only as a player but as a referee too. Not only that, it gives students the chance to make a little spending money and serve as role models to the younger players.

While I doubt I would ever have become a “superstar” on the basketball court, I do feel I missed out on something special by never having played a sport. It seems to me that club activities in Japan really help a student to try something new and work together with their teammates to realize a dream. Even if the team loses the final match, they still have many precious memories of their junior high school days that will be with them forever and not just for a season.